

「私たちの『推し活』」

ヨハネによる福音書 1:29-34

2026年1月4日

野村 友美 師

<「推し活」とは>

新年おめでとうございます。

みなさん、良いお正月を過ごされましたか？
ゆっくり休めた方も、いつもより忙しかった方も、いつも通りに仕事をしておられた方もいらっしゃると思います。

私も先週は少し部屋を片付けたり、車をしっかりめに磨いたり、紅白歌合戦を見たり、お餅を食べたりして、それなりに年末年始を満喫できました。

さて、みなさんは「推し」という言葉をご存知でしょうか？

「推薦する」の「推」の字で「推し」です。

自分にとって特別で、その存在に触れるだけで幸せになれる。できれば他の人たちにもその魅力を知ってほしい。そういう人や物のことを、最近の言い方で「推し」というそうです。

皆さんには「推し」がありますか？

アイドルや俳優が「推し」の方も、お子さんやお孫さんが「推し」の方もおられるでしょう。

映画や本といった作品が「推し」という方もいらっしゃると思います。私の「推し」は、いろいろ考えたんですが、やっぱり猫かもしれません。

フォルムが可愛くて、ニャアと鳴く声が可愛くて、丸っこい足に肉球がついているのがたまらなく可愛いです。好きなときに甘えてきて、でも構われるのは嫌がる。そんな自由気ままなところ

も魅力的です。

猫毛と言われるぐらいですから、毛並みが柔らかくて触り心地がいいですね。

短毛の猫も可愛いし、毛が長い貴族っぽい猫も可愛いと思います。語り出したらいくらでも話し続けられそうなので、この辺で止めておきましょう。

そう、「推し」について語るとき、私たちは自然と情熱的になります。

私の「推し」はこんなに素敵なんですよ！

ここがすごくて、こんなところが魅力的なんです！

「推し」の「推せる」部分をあれも伝えたい、これも伝えなきゃ、とついついその素敵さを語ってしまうんでしょう。

「推し」の存在に触れて、喜びと幸せを味わう。「推し」の良さを、まだ知らない人たちに伝える。そんな「推し」に関わる活動のことを、「推し活」といいます。

今回の聖書の場面はまさに、洗礼者ヨハネの「推し活」と呼びたくなる内容です。

だって最初にさらっと状況を説明したら、後はもう全部ヨハネによる「推し」についての紹介なんですから。

<洗礼者ヨハネの「推し活」>

洗礼者ヨハネの「推し」は、イエス様です。

実際にイエス様に出会う前から、ヨハネはイエス様の「推し活」を始めていました。

絶望の暗闇を照らす、たった一つの希望の光。

人々の期待や予想を超えて、本当の救いをもたらすお方。神様の愛と正しさを、目に見える形で示す神の子。そういう救い主が私の後から来られるんだ、とヨハネはイスラエ

ルの人たちにイエス様の登場を告げ知らせていました。

今日の場面の前日、イスラエルの宗教指導者たちから「あなたは誰？」と尋ねられたヨハネは、こう答えています。

私は救い主の登場を予告して、荒れ野で叫ぶ声だ。私には、そのお方の靴のひもを解く召使いほどの値打ちもない。

このやりとりの翌日、ヨハネはイエス様が自分の方にやって来られるのを見ました。ヨハネの待ちに待った「推し」、イエス様がいよいよ群衆の前に姿を現されたんです。

その嬉しさと興奮が、ヨハネの言葉の隅々に表れているように思います。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」

イエス様の姿を見るや否や、ヨハネの口からはさっそく「推し」を語る言葉があふれ出しました。この時のイエス様が、大体30歳ぐらいだったと言われています。若いといえば若いですけど、もうかなり立派な大人ですよ。

小羊と呼ばれるのは、ちょっと可愛らしすぎる気がします。ヨハネにはイエス様が小羊のように愛らしく見えていた、という訳ではありません。この「神の小羊」という表現は、当時の人々たちにとって、神殿で捧げられる犠牲の羊を連想させるものでした。

自分たちが犯した罪の代償として、財産であり大事な食料でもある小羊を、神様に捧げて赦しを願う。そういう律法の決まり事がイスラエルにはありました。人々の身代わりになって、罪の責任を負って命を捧げる役目を、小羊は担っていたんです。

しかもただの犠牲の小羊じゃなくて、「世の罪を取り除く神の小羊」と、ヨハネはイエス様を紹介しています。

限られた民族や、特別に選ばれた人たちだけのためじゃなくて。この世界に生きるすべての人の罪を背負うために、神様がイエス様を遣わされた。

「世の罪を取り除く神の小羊」という言い方で、ヨハネはそう証言しているんです。

神様がお創りになって愛しておられるすべてのものを、欲望や歪んだ正義で自分勝手に扱おうとする罪。神様以外の何かや誰かを神の座に据えて、人が人を支配しようとする罪。

神様の愛と権威を無視する罪は、誰にとっても決して他人事ではないでしょう。

私たち人間の罪の連鎖が戦争を引き起こして、自然環境を壊して、まさに今この時にも多くの人や生き物を犠牲にし続けています。社会的なことだけではありません。今まで1回も神様を悲しませたことがない人は、誰もいないはず。そんな私たちすべての人の罪を取り除くために来られた「神の小羊」。それがこのお方だ！と、ヨハネは最初にイエス様のことを紹介しました。

その場にいた人々に、そして福音書を通して彼の言葉を聞くすべての人に、ヨハネはイエス様という「推し」の最大のポイントをまず伝えているんです。

ここからヨハネの怒濤の「推し活」が続きます。

ほら、この方が前からあなたたちに話していた人だよ。私の後に来られる、私よりも優れた方。

私よりも先に、それこそ世界の初めから、神様と共にいられた方だ。私はこの方をまだ知らなかった。

でもこの方がイスラエルに現れるために、私

は水であなたたちに洗礼を授けてイエス様を迎える準備をさせていたんだ。

ここまで一気に語って、息継ぎをすると、さらにヨハネは新しい証言をし始めます。

私は、神様の霊が鳩のように天から降ってきて、この方の上に留まるのを見た。この幻想的なエピソードを、他の三つの福音書は、イエス様がヨルダン川でヨハネから洗礼を受けた時の出来事として伝えています。

でもヨハネ本人にとっては、自分がイエス様に洗礼を授けたことなんかはどうでもよくて、それよりもイエス様の「押し」ポイントを伝えなかったようです。

私はこの方を知らなかった、とヨハネはまた繰り返します。私が特別な力でイエス様を見つけたんじゃない、神様が私にイエス様のことを知らせてくださった。

「“霊”が降って、ある人の上にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を受ける人である」と、神様が私に言っておられたんだ。

そう言って、ヨハネは神様の働きを証言しているんです。

イエス様を迎える準備のために、私をお遣わしになった神様が、そのイエス様のことを私に教えてくださったんだ。私はそれを見た。

だからこうやって、イエス様こそ神の子だと証したのだ。

この証言で、ヨハネは彼の「押し活」を締めくくっています。

<私たちの「押し活」>

本当に最初から最後まで、ヨハネは「押し」であるイエス様と、そのイエス様を遣わされた神様についてだけ、熱く語っています。

もちろんイエス様とは比べられませんが、洗礼

者ヨハネだって、神様から遣わされて、けっこう重要な働きをした人でした。

当時のイスラエルの人たちは、ヨハネこそ救い主だと思っていたぐらいです。でもヨハネは自分のすごさや特別さには、まったく興味を示していません。

私はあなたたちよりも先にイエス様のことを知っていた、誰よりもイエス様のことを理解している、なんていうアピールもしません。それどころか「私はこの方を知らなかった」と繰り返して、神様が知らせてくださったという喜びのほうを、大興奮で語っているんです。

私のことはいいから、とにかくイエス様のことを知ってほしい！神様がイエス様の存在を教えてくださった、それが私にとってどんなに嬉しいことだったかを聞いてくれ！

そういうヨハネの叫びが聞こえてきそうな「押し活」っぷりです。

この洗礼者ヨハネの「押し活」こそ、教会の働きの原点と言えるんじゃないかと思います。

自分たちの信仰の素晴らしさとか、クリスチャンの特別さとか、そういうことを伝えるんじゃないくて。私たちはイエス様のことをこんなによく知っている、わかっている、と誰かにアピールするのでもなくて。

「私もこの方を知らなかった。神様が出会わせてくださった」という驚きと喜びを伝えるために、私たちは教会という群れに招かれているんです。

このことを、初期の教会を建て上げた使徒パウロも確信していました。パウロはコリントの教会に宛てた手紙の中で、こんなことを語っています。

「わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるキリスト・イエスを宣べ伝えています。わたしたち自身は、イエスのためにあなたがたに仕える僕なのです。

『闇から光が輝き出よ』と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、明らかになるために。」

(2コリント4:5-7)

自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝える。それが私たちの務めだ、とパウロは「推し活」宣言をしています。自分たちがすごいとか特別だとか、自分たちこそが知っているとか、そんなことはどうでもいいから、とにかくイエス様のことを知ってほしい！洗礼者ヨハネと同じ叫びを、パウロもまた叫んでいるんです。

そして「イエス様を知る」という宝物、イエス様によってあらわされた「神様の愛を知る」という光り輝く希望を、私たちは神様から与えられて、土の器の中に持っている。

そうパウロは証言します。

私たちは誰もがみんな「人間」という土の器です。限界があって、欠点があって、弱さや脆いところもあって、病気になることもあれば、ケガもすることもあるでしょう。

そして、誰もがいつかは死を迎えます。

それはどんな人でも変わりません。

自分のことをいくら自慢したところで、神様から見ればみんな、脆くてデコボコした土の器です。

だからこそ、そんな土の器たちに、神様は宝物を託しておられるというんです。

「闇から光が輝き出よ」とこの世界を創造された神様の力によってのみ、私たちはイエス様を知ることができる。

そうパウロは教えています。

イエス様を知って、神様の愛を知るという宝物は、私たちの力じゃなくてただ神様からの恵みによって、神様の力で与えられる。だからこそ驚きであり、喜びなんです。

私たちは自分自身のことではなくて、イエス様のことを伝えて「推し活」をする共同体です。

神様の愛と権威を無視して、自分や誰かの尊厳を傷つけて、時には命さえ奪ってしまう。

そんな私たちすべての人の罪を取り除くために、イエス様が来てくださいました。

この愛と救いを受け取った者として。

イエス様を知る喜びを、すべての人に伝える「推し活」に、私たち一人一人が今日も送り出されています。

さあ、この新しい一年も私たちは一緒にイエス様を「推し」ていきましょう。

お祈りいたします。